



# 蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆  
近藤真弘

T940-0052  
長岡市神田町1丁目4番10  
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆

小林国二・高橋 潔・高橋利春  
屋代 健・飯泉隆史・太田匡哉  
山内芳次・近藤龍弘・近藤マリ子  
近藤久美子  
印刷・株式会社印刷



ホームページ



インスタグラム

ご家族の皆さままでご覧ください

## 『一味同心』

泰忍 弘

あけましておめでとうございます

本年もよろしくお願い致します

さて今号令和五年新年号の季刊誌は記念すべき一〇〇号となります。創刊号は平成十(一九九八)年ですから今から二十五年前になり、私が總持寺に修行に行く前で大学生の時になります。年に四回の発行である季刊誌を二十五年間休むことなく続けることができたのは、歴代編集委員の皆様をはじめ御寺院様、檀信徒の皆様など、寄稿をくださった方々のおかげと心から感謝申し上げます。

この度改めて今までの季刊誌を見返してみました。二十五

年間の膨大な量の季刊誌には様々な寄稿による記事、近隣寺院の紹介や、猫の語り口で伝えるお寺の様子や私の修行時代の様子など、内容も様々でした。そして何より二十五年間の間に起きたお寺での出来事を余すことなく綴っています。お寺の発行する季刊誌を寺報といいますが、四半世紀の安善寺を詳細に綴った寺報はお寺にとってまさに寺宝といえるものです。今後引き続き安善寺に触れていただく季刊誌をお届けしていきたいと思えます。

様々な活動の事務的なことを行う所です。教化主事は、主に管内僧侶や寺族向けの研修会を設営したり、布教に関する事に携わるお役です。事務所が長岡市内にあり、月・水・金の十時から十六時までそこで事務仕事をしています。私は基本的に金曜日の担当で、毎週金曜日に事務所に通っていました。

任期は四年で所長以下七人の所員があり、事務仕事以外にも年間多くの行事を運営しております。

四年前の十二月に教化主事に任命されたときには翌年に自身の晋山式を控えており、大変慌ただしい中ではありましたが何とか初年度の行事を勤めることができました。しかし二年目、三年目はコロナウィルスの影響で、ほとんどの行事が中止を余儀なくされ、中には準備して直前で中

止になってしまった行事もありました。昨年最後の年は宗務所の主催する行事は滞りなく開催することができ、何とか掉尾を飾ることができました。

「一味同心」という四字熟語があります。同じ目的の下に力を合わせ、心を一つにすること、という意味です。有名な言葉ですが、この四字熟語の中の「一味」というのはもともと仏教の言葉で、時・所・人によって現象は多様であるが、大海の味はどこでも同じであるように、本旨は同一で平等無差別である、といった教えです。

宗務所も三者三様の所員がいます。しかし四年間七人が同じ目的の下、まさに一味になり心一つに活動した期間は私にとって大変有り難い時間でした。

今年も様々な出会いがあると思えます。出会いは自身の成長に繋がります。今までの出会いを大切に、新たな出会いに期待して良い年を歩んでいきましょう。

# 安善寺季刊誌 一〇〇〇号を祝い

季刊誌 編集長 小林 国二

二十五年前に、前編集長の故安藤一夫氏から初月忌の総代や世話人が集まる会合でお誘いを受けて始められた季刊誌発行。編集委員のお話を酔った勢いでお引き受けしたのが始まりでした。季刊誌十八号から何故か編集長を仰せつかり今の今まで継続しておりました。それが、一〇〇〇号とは！よく続いたものです。



内容は充実していたと思っております。安藤前編集長の方針は「判りやすい内容で親しみのあるお寺（仏教）の発信」でした。年に四回の発行です。当初から安藤さんの会社の株アサヒ様が、安藤さんが逝っても最初からバックアップして下さいましたので、難しいことはお任せで簡単な編集で済みました。今は山内氏が全面で企画構成しております。記事はお寺歳時記から総代さんの寄稿、その時々編集委員

員の友人などから寄稿を戴き、内容を盛り上げて頂きました。その積み重ねが一〇〇〇号発行と、皆様に感謝申し上げます。少しは仏教を理解して頂けたでしょうか？今も内容的にそこが問題です。お寺への質問（仏教やしきたりなど）や回答のコーナーや行事に合わせた広報など多面に渡り企画したつもりです。一番はご家族の思い出や長岡を想う気持ちの寄稿でした。なかなか寄稿を戴けない時はこの季刊誌の役目は？と迷うこともありました。それなりに寄稿を戴けると編集委員は張り切るのです。

歴史を作ると言いますが、現和尚が修行から安善寺に戻り結婚し、子供が出来、大和尚になる儀式も無事終え確実に成長している姿を季刊誌も追っかけておりました。まさしく、季刊誌感無量です。今も編集方針に変わりはありませんが、問題なのは一〇〇〇号を作った来た古参の編集委員は私を含め、二人になりました。若い編集委員が入ってくれないと続かないことになり

匆々

一〇〇〇号記念  
季刊誌でたどる  
安善寺の  
二十五年



平成 13 年 3 月 第 13 号  
一番人気の巻末「ヘコのひとりごと」この号では真弘住職が大本山總持寺に修行に行く直前の様子。このコーナーのおかげでお寺の家族の様子を皆さんにお伝え出来ました。



平成 12 年 1 月 第 8 号  
初めてのカラー印刷は平成 11 年 10 月に大本山總持寺で龍弘方丈が焼香師の大役を務めたご報告です。当時大勢の檀信徒の皆様と一緒に参列されました。



平成 10 年 3 月 創刊号  
25 年前発刊の創刊号。記念すべき創刊号には 4 ページの紙面に安善寺の歴史や行事紹介、当時の総代さんのご挨拶や修行の案内など盛りだくさんの内容でした。

# 第一〇〇号発行にあたり

安善寺総代  
季刊誌編集委員 高橋 潔

季刊誌「蔵王山安善寺」が二十五年間に及ぶ第一〇〇号の発行です。第一号がどのようなことでも発行されたのか、日中国交回復の時、中国周恩来首相が言ったとされる言葉「飲水思源（水を飲むときには、その井戸を掘ってくれた人を忘れない）に倣いその口火を切った方に触れておきたい」と思います。

平成十年一月の初月忌の後、の懇親会で世話人の一人「安藤一夫」さんが、「安善寺の会報みたいなものが在っても良いんじゃないですか」という発言をされました。お寺とお檀家と繋ぐものとして、私も「宜しいのではないですか」と他人事の返事をしたのですが、高橋さんも編集会議に出て下さいということになってしまいました。

さんは記事の内容から紙面の割り振り迄、ここはこういう記事で、ここはこういうレイアウトでと指示されてゆきま

進めて下さいました。編集委員も力を合わせ二十五年間継続させてきました。よく続いたものだと思います。いつの間にか最初からの編集委員は龍弘東堂様と奥様、小林編集長、そして私の四人になってしまいました。古参編集委員としては子供たちも含め若い方に読んでもらえるような工夫を取り入れ、季刊誌がお寺とお檀家との懸け橋として継続していつてくれるよう願っております。

これは大ピンチです。果たして継続していけるのか。その難局を救ってくれたのが現編集長「小林国二」さんです。小林編集長は記事に困ると、私の知り合いに記事を書いてもらうとか、それも無ければ俺が書くとか精力的に編集を



「季刊 蔵王山安善寺」生みの親であり故安藤一夫編集長



「大山山總持寺 雲水日記」  
とんでもない所へ来てしまっ



「大山山總持寺 雲水日記」  
とんでもない所へ来てしまっ

## 安善寺でコンサート!

— KAKA(呵呵)笑の会発足 —  
加藤 山紀子

皆様のお陰で  
客殿が完成しました

平成 18年 3月 第33号  
中越地震で半壊した以前の建物を壊し、新たに鉄筋2階建ての客殿、坐禅堂が完成いたしました。多くの皆様の御協力に感謝いたします。

平成 15年 7月 第22号  
KAKA笑の会第1回はチェロのコンサートでした。現在は多く行われている寺コンサートもKAKA笑の会のおかげで20年も前から毎年開催しています。

平成 14年 9月 第19号  
この号より真弘住職が「雲水日記」として大山山總持寺での修行中の出来事を掲載。平成 19年安善寺に戻るまで5年間20回ほどの連載でした。

平成 14年 7月 第18号  
季刊誌生みの親で、その礎を築かれた初代編集長 安藤一夫様が逝去なされ、ご遺徳を偲ぶべく見開きで多くの思い出を掲載いたしました。

# 『安善一滴水』

龍穩院東堂 櫻井 統一 (九十四歳)

令和五年の新春謹んでお慶び申し上げます。また、寺誌「蔵王山安善寺」発刊一〇〇号慶賀至極に存じ上げます。

昨年九月十日発刊の安善寺寺誌九十九号の編集雑感に「この季刊誌一略一は九十九号です。一略一年四回の発行で実に二十五年間も続いていることになりました。ということとは、次号は第一〇〇号ということになります。一略一四半世紀も継続出来たこの季刊誌をお檀家の皆様と一緒に喜びを分かちあえる第一〇〇号にしたいと思えます」とあり、一〇〇号の発刊に大なる期待を寄せておられる編者の思いに頭が下がります。閑話休題。

ろが、北ア最奥部に黒部川源流なる所がある。ここはまさしく觴しか濫べられないほどの広さしかない。

この黒部川源流は、鷲羽岳(二、九二四メートル)の西三俣蓮華岳の北に位置し、近くの三俣山荘から徒歩約三十分位のところにある。一面のお花畑の中を、清らかな水が流れている。まことに静かなところだ。黒部川源地標の標識である四角の石柱が置いてある。この地こそ正真、黒部川の源流なのである。この一滴水が、やがて黒部のV字峡谷を作り、宇奈月を流れ下って富山湾に注いでいるのだ。この濫觴の地を私は二回訪れた。一回は烏帽子岳から野口五郎岳を経て鷲羽岳へ出るコースを歩いたとき。もう一回は、黒部五郎岳から三俣蓮華岳のコースを歩いたときである。

その度毎に、この源流の一滴水に渴いた喉を潤し、妙に厳肅な気分になったのが今に忘れられない。

「蔵王山安善寺」という寺誌の一滴水が、四半世紀の永きに亘って流れ、多くの人々の心の支えとなり、糧となつて広がっていることは、まことに尊いことである。心から敬意を表するものである。さらなる精進と発展を祈念申し上げる次第である。

失礼ながら一〇〇号をお祝いして一首を捧げます。

安善一滴水 下平一先韻  
蔵王滴水彩雲間  
唳唳清音度越天  
一個半仁惺了去  
百号寺誌法施旋  
以上

## 追記

「自分の詩をほかの人に示すときには、いずれの場合であれ、句読点や返り点、送りがないは付けられないことになっていきます」と先哲の教えにあります。ましてや訓読を付すなど避けるべきでしょう。さりながら、最近の学校では漢文より英語が重視され、漢文は古典の一部分に過ぎないのが現状です。ために、当然漢語・漢文の知識は、かつての日本人に比すれば、その差は明白白白であります。

というわけで、あえて訓読と略意を記すことにしました。

〔訓読〕  
安善の一滴水  
蔵王の滴水彩雲の間  
唳唳たる清音越天を渡る  
一個半仁惺了し去り  
百号の寺誌法施旋る  
〔略意〕  
安善寺の一滴の水が、清らかな響きをたてて越後の空を渡ってゆく。  
人々を教化して、寺誌一〇〇号が読み継がれる。

終



山門吉慶  
平成21年7月 第46号  
住職夫婦の結婚式のご報告で季刊誌初のオールカラーでお届けいたしました。このように結婚のご報告が皆様に見えるのも季刊誌のおかげです。



天国から見守っています  
平成21年1月 第44号  
長年皆さんに独り言をお伝えしてきた「ペコ」が20歳で亡くなりました。30数回にわたる連載でファンも多く、たくさんの方に労いの言葉を頂戴いたしました。



安善寺に戻って参りました  
平成19年7月 第38号  
真弘住職が6年間の修行を終えて安善寺に帰ってきました。安善寺では50人を超える団体参拝で大本山總持寺に赴きました。



ネコからの電話!!  
平成18年9月 第35号  
「ペコのひとりごと」にボブが初登場。今号と36号には新たな猫ボブに振り回されるペコとサクラ(犬)の様子が書かれています。

# 季刊『蔵王山安善寺』

## 創刊号からこれまでの皆様の想い

二十五年前の一月十八日(日)に行われた安善寺の恒例行事、「開山・歴代住職の初月忌法要・並びに総代・世話人会議」の折、故安藤一夫様から、安善寺の会報を発刊したらと提案があり、全員の賛同を得、その場で編集委員のメンバーが決まり、二月中旬に安藤一夫編集委員長のもと、八名の編集委員会で初会議。平成十年三月七日に季刊『蔵王山安善寺』創刊号が発刊された。年四回の発刊、今回が記念すべき一〇〇号である。

安藤様の「安善寺が檀信徒の皆様方から身近な存在になるように。また本来のお寺の使命を伝えることで、仏教が大勢の人達に親しんでいただき、生活に活かしてもらいたい」との願いのもと、一切の負担を担われ、大変なご尽力を賜りました。しかし季刊十八号の発刊を待たずして、安藤様は他界されました。その後



年4回の発刊で、これまで99号を積み重ねてきました。

は(株)アサヒ様のご厚意をいただき、小林国一 新編集委員長のもと、二十二年間、八十八号まで続けさせていただきました。その間、編集関連の全てを担当していただいた近藤善信様には、大変なお難儀を頂戴し、奥様には毎号、文章に見合った本当に素敵なイラストを添えて頂き、多くの方々から季刊誌に親しみを感ずるとのお声を多数いただきました。改めて感謝申し上げます。

その後、真弘住職の元で続けてまいり、今回一〇〇号記念としての発行となりました。これを機会に改めて創刊号より九十九号迄読み直してみますと、編集委員の皆様のご苦勞のおかげもあり、檀信徒の皆様をはじめ多くの方々から原稿をお寄せいただき、安善寺と檀信徒の皆様方をはじめ多くの方々の身近な存在になり得ることが出来ました。

### ◎ 仏教、仏事に

#### 関するご質問

##### ご質問

「修証義第四章(自未得度先度佗の心を発すべし)」とはどういった意味でしょうか」

##### お答え

「自分より先に他の人々を救いましょうということ。そのためには同じく第四章の利行(見返りを求めず相手のためになる行い)や同事(相手の悲しみや苦しみに寄り添う行い)の心を持つことが大切です。

##### ご質問

「お線香にはどんな意味がありますか。煙が苦手なので少ないのを使っています。」

##### お答え

「場を清めたり、個人が香りを出すという考えもあるようですが、私は、これらからご供養させていただきます」とその場に気持ちを入れたらしてとしてまっすぐに線香を立てます。煙が苦手でしたら煙の少ない線香をご利用いただいで結構です。」



令和2年1月 第88号  
令和元年10月6日に厳修した28世晋山27世退董26世33回忌のご報告。準備の段階から含め多くの方に御加担御協力を賜りました。



平成25年1月 第60号  
新潟県宗現寺乙川映元老師を導師に拝請し、安善寺開山長翁存宗大和尚の450回大遠忌を盛大に厳修いたしました。



平成23年7月 第54号  
東北地震で被災され長岡の避難所で避難生活をされている南相馬の方に KAKA 笑の会では炊き出しのボランティアを行いNHKでも放映されました。



平成23年7月 第54号  
龍弘方丈2度目の大本山總持寺での焼香師を勤め、真弘住職が改めて大本山總持寺に上山するなど様々なことがありました。

# 安善寺様の「ボブ」猫の訃報に接して

元 淑徳大学 教授 田宮 仁

今日、令和四年十月一日、久しぶりに大手大橋を渡り、散髪の後、安善寺様に東堂様を訪ねた。東堂様龍弘師はお元氣そうであったが、奥様から、「ボブ」が三日前に亡くなりましたと告げられた。最後はご家族に看取られての大往生、十七歳であったという。

寺報『蔵王山 安善寺』に「ボブ」が初めて紹介されたのは、第三十五号の「ペコ大蔵日記パートⅡ」に「生後三ヶ月くらいの黒白の猫(牡)」として初登場している。次いで、



季刊誌 第35号(2006年)で初めて紹介された「ボブ」

三十六号で「ボブ」という名前も付けられて登場している。「ボブ」という名前の由来はお聞きしていないが、東堂様ご夫妻の世代的にみれば「ボブ・ディラン(Bob Dylan)」に因んでの命名かと、勝手な推測をしている。その「ボブ」が亡くなったという。

「ボブ」の写真は寺報『蔵王山 安善寺』が届く度に、楽しみに拝見してきた。白黒模様の姿で、特に鼻筋から口にかけて墨汁たっぷりに太々と滲んだ「人」か「心」を書いて



季刊誌 第6号(1999年)で初登場の「ペコ」

たような、黒の模様は凄みになつてもおかしくないのだが、どこかトボケタ愛嬌になつていた。

帰り際に御本堂の余間にお骨となつて花々に囲まれて安置されていた「ボブ」に掌を合わせた。

「ボブ」は現在の方丈(ご住職)様真弘師のご本山での修行時代や、華燭の典、若の誕生と、つぶさに見つめ同じ空気を呼吸してきた大事な存在であり、東堂様ご夫妻だけでなく、方丈様真弘師と奥様に随分と可愛がられ、世話になつたと伺っている。

先住猫の「ペコ」は、「腹ペコ」の「ペコ」に因んだということでした。平成十一年第六号に「私はペコ大蔵」で初登場。それ以来、次号の第七号からは「ペコ大蔵日記」、「ペコ大蔵日記 パートⅡ」と第四十四号まで、実に待ち遠しい連載が続いた。申し訳ないことに、表紙の方丈様の原稿

よりも先に「ペコ」の写真と軽妙にして温もりのある文章を楽しみにしていた。まことに寂しい限りである。

「ペコ」も「ボブ」も姿は何回か見ているが、私の膝の上に乗ってくれたことはない。第十四号に初登場したシェパードの雌犬の「さくら」のことは、犬に玉葱はダメとい

うことを初めて知った「たまねぎ事件」が忘れられない。「さくら」の声は、伺う度に聞こえていた。懐かしい三者(匹)である。

合掌

令和四年十月一日

田宮 仁 拝

## 〈参 考〉

- ・寺報『蔵王山 安善寺』第六号 一九九九年、平成十一年七月五日発行 「私はペコ大蔵」
- ・寺報『蔵王山 安善寺』第七号 一九九九年、平成十一年九月十三日発行 「ニヤーンと笑ったお話」 「ペコ大蔵日記」として連載化。十一号から「ペコ大蔵日記パートⅡ」と連載名が変わる
- ・寺報『蔵王山 安善寺』第十四号 二〇〇一年、平成十三年七月五日発行 「何だか変だぞ」に「さくら」登場
- ・寺報『蔵王山 安善寺』第三十五号 二〇〇六年、平成十八年九月十五日発行 「ボブ」初登場
- ・寺報『蔵王山 安善寺』第四十四号 二〇〇九年、平成二十一年一月一日発行 「天国から見守っています」 「ペコ大蔵日記パートⅡ」最終回 「ペコ」二十一歳
- ・寺報『蔵王山 安善寺』第四十五号 二〇〇九年、平成二十一年三月十日発行 「ボブの独り言」新連載始まる
- ・寺報『蔵王山 安善寺』第九十九号 二〇二二年、令和四年九月十日発行 「今日も子供たちの元気な声を聴き、優しい手に触れる この時間よ永遠に」：「ボブの独り言」の最終回になるかも

二〇〇三年（平成十五年）九月号より

「もう一度、妻と聴く」

長岡市 大勢待 宗一

艶やかな音色と定評のチェロ奏者。ピアノ、ホルン、スキーの演奏を、  
丁市の公会堂で、彼女と聴いたのは昭和三十一年でした。

まだ男女交際はお忍びの時代で、アンコール曲の「白鳥」に、  
彼女との同伴効果も加わって、「人生はバラ色だ」と舞い上がる  
思いだった。その彼女と結婚してから二十九歳の歳月を経て、妻  
は不運にも病に倒れて亡くなった。

今年の十三回忌は、方丈様にお経を上げていただいて、若い孫  
たちも加わっての供養でした。

もう十年以上も前になるでしょうか、娘が北海道旅行に旅立ち  
の朝、「お母さんも連れていくよ」と、分骨と写真を持って出かけ  
ました。その娘の行為に、供養の仕方色々あるのを知って、  
皇居一周の散歩、立山登山にと、胸に下げて歩きました。

七月のチェロコンサートは、本堂のローソクの炎を揺るがすよ  
うに響くピアノとチェロの演奏を、ご先祖様方と一緒に、妻の  
分骨と写真抱いて聴かせていただきました。

四十七年前、丁市で青春の血を沸かせて聴いた「白鳥」を、妻  
の十三回忌の年に分骨を抱いて安善寺で聴いたことに「縁」を感  
じて、素晴らしい供養をさせていただいたと、胸を熱くしました。  
企画された呵呵笑の会幹事の皆様、ありがとうございました。

会の発展をお祈りします。

創刊十号記念号 「読者からのお便り」より

「心に残ったある夏」

北海道紋別市 須藤 秀雄

平成六年の未だ流水の去らない彼岸の中日に、九十六歳の父と  
半日おいて母（九十四歳）を自宅で見取りました。

一年後、初めて聞く蝉時雨の中、方丈様の厳肅ななかにも慈愛  
あふれる読経のもと、安善寺の近所で育った父と新潟生まれの母  
を故郷の地に還すことができました。万感胸に迫るものがあり、  
落涙が白骨に一粒二粒、父母に送った最後の贈り物でした。

七十余年も北海道に住みながらも、故郷は懐かしく忘れ難いも  
のがあるようでした母の「内地に帰ろうかな」という言葉は、安  
善寺の境内で安らかに休むことだったのかもしれない。

私が長岡を訪れたのは、七歳の子供の時、雁木の町と雪に覆  
われたお墓、笹飴しか記憶にありませんが、この父母の故郷で兄  
弟の家族や子供達で法要を行えたことは、亡き父母が私達に贈っ  
てくれた最大の機会だったと思います。

父が信心深く儉約を旨とし、教育に熱心だったのは、米百俵の  
長岡の血が流れていたのだと感じた一族の旅でした。

方丈様や奥様のご配慮で、無事法要を終えられたことを感謝し、  
また先住様を偲びつつ安善寺をあとにしました。

須藤 静子

安善寺緋の衣の目にまぶし

義父母の納骨ふる里に帰る

縁者らが和みて囲む齋の膳

義父母の好む幸の多かれ

仏さまのおすそわけ  
数珠つなぎフードパントリー

～誰ひとりとり残されない世の中に！お寺を提供の場へ～

食材や日用品の提供にご協力ください！！

\* 詳細はお寺にお尋ねください \*

主催：長岡市仏教会青年部  
協力：新潟県フードバンク連絡協議



安善寺 庭園型樹木葬 『翠緑の小径』

- お墓に  
庭木葬墓地で  
御法要
- お墓の  
お墓の  
お墓の  
お墓の
- お墓の  
お墓の  
お墓の  
お墓の
- お墓の  
お墓の  
お墓の  
お墓の



【お問合せ】株式会社 放光  
フリーダイヤル 0120-811-112

安善寺 樹木葬墓地ご案内ページ  
<https://anzenji-jiyumokusou.com/>





17年間、愛してくれてありがとう。

またまた  
ボブのひとり言

# 十七年間、幸せな猫生でした。 お空の上からみんなの幸せを 願っているニャーン。

## ボブのひとり言



いつだったろうか。夏の暑い日だったろうか、生まれて初めて花火の音を聞いた頃だったろうか、私は安善寺の猫になった。先輩猫であるペコの洗礼を受け、無事に家族となつてからのやんちゃぶりはすごかった。障子を破り、あちこちマーキング、鳩やオナガを仕留め、夜な夜な近所の野良猫と勝負をする。広い境内を自由気ままに散歩するのが日課なのだが、外の世界を知りたくて、時々ふらつと家出

をした。嫁に来たばかりの久美さんに何度も心配をかけたものだ。やんちゃな野良猫になつて来たかもしれないこんな私はここに来て、たくさんの愛情をもらい、『幸せ太りの大きな猫』になれたのだ。そんな大きな身体も近頃は病気のせいとか小さくなつていった。弱つていく私に真人君、悠真君は毎日話しかけてくれる。二人が赤ちゃんの頃はベビー

ベッドによくお邪魔した。私と同じ大ききくらいだったのに、いつの間にか私のお世話が出来るほど立派になった。猫じゃらしやネズミのおもちゃで一緒に遊んだことを覚えていたかい？本堂でかくれんぼもしたよね。隠れている場所から飛びだして驚かせるのは本当に楽しかった。温かな思い出話をずつとしていたが、そろそろその時がきたようだ。私のそばには家族の誰よりも長く一緒にいた久美さんがいる。私を抱きしめて泣きながら話しかけてくれる。ボブちゃんありがとう、ありがとう。最期のそのときまで愛おしく名前を呼んでくれてありがとう。そして私の最後のひとりごと、十七年間、幸せな猫生でした。お空の上からみんなの幸せを願っているニャーン。

**お便り原稿用紙**

皆様からの原稿をお待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。

**FAX 0258-32-2870**  
 〈原稿送付先〉メール info@anzenji-nagaoka.com  
 HP にも申込フォームがあります

**編集 雑感**

一〇〇号記念季刊誌！歴史は作られる。よく続いた季刊誌、先の編集委員会での思い出は相変わらずの酒と肴の話で終始した。よくもまあ良く食べ良く呑んだ話となる。季節の料理は絶品、高級な日本酒で話は尽きない。編集委員会は簡単ですぐ終わり、期待の祝宴が皆を待っている。ビールで乾杯し日本酒やワインで話が進む。

長岡の縮図を見るような内容で面白い。参加する方々はそれぞれの分野の方々に面白く興味ある内容の話になる。それを二十五年もやって来た！まずは、東堂様の奥様に御礼

を言わねばならない。毎々美味しいものを有難うございます。今後も宜しく願います。また、この機会を与えて下さいました、故安藤一夫様に感謝申し上げます。

新しい年にあたり、読者の皆様には明けましておめでとうございませう。季刊誌の応援をこれからも宜しくお願い申し上げます。

私事ですが、昨年はまだコロナ禍でありましたが、二年遅れの古稀花火を高校有志の同期生で上げる事が出来ました。これも生きていくからこそ出来る行事です。生きていくことは何でも出来る事でもありません。大小は別にしてやり遂げることが重要でしょう。卯年は可愛らしさと同時に大きく飛び跳ねる年でもあります。何があるか判らない世の中ではありますが、やると決めたらやり遂げることが大事！季刊誌もやると決めてから一〇〇号二十五周年かかりましたが、これからもやり遂げねばなりません。若い力をお貸し下さい。

参加希望者は安善寺住職迄お申し出下さい。刻々と変わる世の中、変わらない世界もあるのです。伝統・文化を継承し季刊誌を作り上げて参ります。

(小林国二)